

「十字架につけろ！」（マタイによる福音書26:36～27:66）

司祭ヨセフ太田信三

復活前主日の礼拝では毎年、皆で分担して長い長いご受難までの聖書箇所を朗読します。たいてい、群衆の「十字架につけろ」というセリフは、会衆一同、叫びに近い声で読み上げます。わたしは幼い頃、この叫ぶのが何だか楽しかったことを憶えています。しかしある時から、これがとても怖い叫びだと気が付きました。歓呼のうちに主イエスをエルサレムに迎えた群衆が、たった一週間後には「十字架につけろ！」と叫ぶのです。たしかに主イエスはまことの王でした。全人類に救いをもたらすメシアでした。しかし、主イエスは人々が期待した、支配国ローマから力強く解放してくれる王ではありませんでした。ここに、残酷な人間の姿が表されています。自分の期待や想像に固執し、思考停止し、増幅する憎悪に支配されてしまう人間の姿、集団心理の恐ろしさ。群衆もさることながら、何が正しいかをぼんやりと認識していながらも、責任を逃れようとする為政者の姿、そして、裏切ってしまう弟子たちの姿、、、ゴルゴタへの道のりは、このような人間の闇が明らかにされていく道のりです。

「共に目を覚ましていなさい」と言われても、ペトロは眠ってしまいます。主イエスはまた、言います。「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」それでも、主イエスが決死の思いで祈っているにもかかわらず、弟子たちは眠ってしまいます。主イエスはこれまでも繰り返し「目を覚ましていなさい」と言われています。しかし、この箇所を読むと、人間が目を覚ましていることができないことを知らされます。そして、眠ってしまうことのなんと残酷なことか、と思わされます。近くで主イエスが必死で祈っているにもかかわらず、その辛さや痛みが気が付かずに、眠ってしまうのが人間です。主イエスの孤独はどれほどのものだったのでしょうか。しかし、これはとてもリアルなわたしたち人間の姿です。近くで苦しみに叫ぶ命があるにも関わらず、わたしたち人間は目を閉じたまま、眠っていて気がつくことができないのです。これが、神と人を愛しぬくことができない人間の罪の姿です。悪気もなく、眠ってしまうのです。しかし、そんな弟子たちを主イエスは見捨てることなく、剣を抜いた弟子に「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」と言われ、導くことをやめません。主イエスの忍耐と深い愛を感じます。しかしこの愛と忍耐を向けられても、弟子たちは最終的には十字架に向かっていく主イエスを裏切ってしまうのです。

十字架上の死、という結末を本当に分かっていたのは主イエスだけです。弟子たちは、話しには聞いていたけれども、実感がなかったのでしょうか。もっといえば、信じていなかったのです。師匠が十字架にかけられることなどない、きっと大丈夫だ、と根拠なく思っていたのかもしれませんが。まして、自分が主イエスを裏切るなどとは、想像もしていなかったでしょう。しかし、主イエスは十字架につけられ、弟子たちは裏切るのです。「心は燃えても、肉体は弱い。」主イエスが引き渡されていく姿、裁

判にかけられる姿、罵られる姿、それらを目の当たりにした弟子たちは、肉体の内側から、恐怖したことでしょう。それこそガタガタ震えながら。恐れに支配されたペトロは、呪いの言葉すら吐くのです。人間は、危機が自分に及ばない段階では、強気でいられるのです。自信もある。また、どこか無関心でもいられるのです。まるで、今の世界の現実を見ているようです。テレビ越しに観ていた中国の現実が、自らの危機になるに至ってようやく、無関心でいられなくなる。そして急激に自信も奪われ、恐怖に支配されてしまう。眠ってしまっていた弟子たちが、主イエスが十字架に掛けられるに至って裏切ってしまうほどに豹変するのと同じです。そして、分かち合えば足りると言われても、恐怖に支配され、スーパーマーケットで奪い合う、医療従事者への差別的発言をする…。まさに、「十字架につけろ！」と叫ぶ、不安と狂気に支配された人間の姿です。わたしたちは落ち着いて、自分を見つめなければなりません。

主イエスの十字架への一週間、これほどまでに人間の闇、罪深さが明らかにされます。この弱き存在、人間が主イエスを十字架上で殺すのです。いよいよ一週間後に祝おうとしている復活日、わたしたちはこの人間の闇、罪深さを自らのうちに認めぬままに、まことに喜ぶことはできません。どうしても眠ってしまう人間の姿、裏切る姿、歓呼で迎えた一週間後に「十字架につけろ！」と叫ぶ姿、人の命よりも自分のメンツを優先する姿…。これはすべて、わたしたち人間の姿です。この一週間、わたしたちは自らを顧みなければなりません。人間は、自分はどうしようもない、と痛感するかもしれません。しかし、そのどうしようもない人間のために、主イエスは十字架に登っていただきました。そして、神はその主イエスを復活させるのです。そこにこそ、真実の愛、まことの救いがあります。この物語に他人事でいては、その愛を、救いをいただくことはできません。むしろ、主イエスの十字架への道なりに自らの存在を認めるとき、わたしたちは、百人隊長のように、信仰告白に至る、まことの救い主、メシアとの出会いに与ります。そしてその出会いのゆえにこそ、ご復活という究極の救いの出来事を心から祝うことができるのです。だからこそ、この一週間、わたしたちは自らを省み、ゴルゴタへの道なりに、自らの存在を認めなければなりません。

主イエスは十字架上で苦しみを引き受けられました。すべての苦しみや悲しみにある、孤独の中にある命と共にあるためです。主イエスは、わたしたちが眠りこけ、無視してしまっている悲しみや苦しみと共におられます。また、わたしたちが、苦しみや悲しみにあるとき、誰にも分かってもらえないとき、主イエスが共におられます。主イエスの十字架の姿は、わたしたちが苦しみや悲しみに無関心であることを許しません。十字架を見つめるとき、そこに、わたしたちの代わりにすべてを引き受けた方がおられます。なぜ、神の子が、その残酷な処刑道具の上で死ななければならなかったのか、なぜまことの王と言われる人間がそこに自ら登ったのか…。十字架はわたしたちに問いかけます。それらの間に直面することから、わたしたちの目は開かれてい

くのです。

この一週間、自らを省みつつ、十字架を見つめましょう。先日、クリスチャンではない方とお話をしているとき、ふと十字架の話になりました。その方が「神が十字架を選んだってすごいですね。何故か目を引く。心が向く。」ということをおっしゃいました。それを聞き、そうか、だからこそ主イエスは十字架に登られたのか、と感じました。十字架はファッションではありません。処刑道具です。あの主イエスの十字架上の沈黙のお姿ほどにわたしたちに語りかけるものはありません。あのもっとも尊い方が十字架上で沈黙されている。神と等しい者でありながら、人となり、へりくだって、死に至るまで従順であった。そして、死んでしまった。わたしたちのために。その姿を見る時、わたしたちの奢りや偉くなろうとする心、闇に支配される弱く頑なな心が砕かれます。それらを全部、主イエスは十字架上でご自分の命もろとも砕いてくださったのです。その姿を見るなら、わたしたちは砕かれ、神の愛をいただく心が与えられます。主イエスは十字架上で、両手を広げて自らの命をささげました。主イエスは今も、御手を広げてわたしたちを神との愛の交わりへと招いておられます。その招きに応え、わたしたちも両腕に抱えているものを手放し、両手を開いて主イエスのもとへと向かいましょう。

さあ、イースターまであと一週間です。